論　文

Arvanitikaにおける動詞句の構造について

ー北東アッティカ・ボイオティア地方のアルバニア語を対象としてー

井浦　伊知郎

0. 序

0.1. ギリシアのアルバニア人とアルバニア語

現在ギリシア国内には、主にビザンツ後期及びオスマントルコ治下で移住したアルバニア人の末裔、また今世紀に入り主に経済的理由からギリシアに移り住んだアルバニア人が生活している（Buchholz/ Fiedler 1987:13, Bartl 1995: 15 他）。その数は約５万人またはそれ以上とも考えられるが、公的な統計による数値は知られていない[1)]。

アルバニア系住民の居住地域は大きく２つに分けられる。１つは、アルバニアと国境を接するギリシア北部のアルバニア人である。今世紀に入ってからも隣国との言語接触が続いた為、ここで使用されるアルバニア語（チャメリア方言 çamërishtja）の特徴は、南部アルバニア方言のそれにかなり近い（Sasse 1991b: 3-5, Gjinari 1989: 57-56）。

もう１つは、ギリシアのより南部、すなわち中部ギリシアからペロポネソスに及ぶ地域のアルバニア系住民である。その多くは 12 世紀から 14 世紀にかけて移住したアルバニア人の子孫で、北部のアルバニア人よりも比較的早い時期に移住していることになる。地理的にも完全にアルバニアから切り離され、ギリシア語文化圏の包囲下で数世代にわたる生活を続けた為、この住民の中にはもはやアルバニア語を使用しない村落や年齢層もある。語彙的にもギリシア語の影響は大きい[2)]。

一方、この地域のアルバニア語には、アルバニア国内のアルバニア語では既に消滅した古形がしばしば保持されている[3)]。こうした傾向はブルガリアやウクライナ等、他の（しかもそれぞれの国の有力な言語に包囲されている）アルバニア人居住地域にも見られ、共時的のみならず通時的な研究の上でも興味深い点が多い（Sasse 1991a）。

0.2. Arvanitika

ギリシアのアルバニア系住民は、自らを arvaɲítə（複数形）と称し、また自らの言語を arvaɲíte（女性複数形）と呼ぶ（地域や年代によっては、南イタリアへ移住したアルバニア人 arbreʃ に由来する古称 arbəríʃt も用いられる）。一方ギリシア語では αρβανίτες（複数形）、またその言語は αρβανίτικα（中性複数形）と呼ばれる。以下、このギリシアのアルバニア語を Arvanitika[4] で統一する。

アルバニア人居住地域の中で最も規模が大きいのは Επαρχία Αττικής の北東部、すなわち南エウボイア湾の後方に位置し、Πάρνηθα, Πέντελη 両山脈の間に点在する、マルコプロ Μαρκόπουλον（通称 Μαρκόπουλο）、アヴロン Αυλών（通称 Κακοσάλεσι）等 20 余りの村より成る地域である。そしてここで用いられる北東ボイオティア方言が、Arvanitika の代表的なものとされている。

Arvanitika に関する研究は、19 世紀中頃から、語彙録作成を始めとして数多く行われてきた（Jochalas 1977）。特にドイツ語圏では、既にサラミスやアンドロスの方言を対象としたモノグラフが出版されている（Haebler 1965, Sasse 1991a: 63）。

1989 年前後からはギリシア全域を対象とする包括的な資料集の編纂が始められ、全 4 巻の予定で 1991 年から刊行が進んでいる。第 1 巻には北東ボイオティア方言の音韻論、形態論、語形成、統語論に関する解説、及び同方言の語彙、会話、詩、民間伝承のテクストが収録されている。また、未刊行の第 2 巻以降では、ボイオティア、エウボイア、ペロポネソス等各地の資料が、まとまった形としては初めて紹介されることになっている（Sasse 1991a）。

0.3. 本論文の目的

そこで本論文では、この北東ボイオティア方言（以下、特に断らない限りこれを Arvanitika と称する）について、上掲書第 1 巻に収載された例文を用い、特に動詞及び動詞句に対象を絞ってその特徴を概観する。まず動詞の語彙形成に見られるギリシア語の影響を例示する。次に、動詞句の構造、特に未来形や弱形人称代名詞や前置詞を伴う構造について標準アルバニア語やギリシア語との比較対照を行い、そこにどの様な異同が見られるか検討する。

1. Arvanitika の動詞

Arvanitika の動詞は、数・人称・時制等の文法範疇において標準語と変わるところはない。不定詞も（アルバニア語やギリシア語、他のバルカン諸語と同様

に）消失しており、分詞形がその代わりを務めている。ただし屈折には古形の名残りが見られる[5]。

Arvanitika の語彙にはギリシア語が多数含まれており、動詞も例外でない。その種類は動詞そのものがギリシア語由来であるもの、アルバニア語の動詞にギリシア語由来の接頭辞が伴われるもの、ギリシア語由来の動詞にギリシア語接頭辞が組み合わされ、全体としてギリシア語動詞とほとんど違わないもの等に分類される。

1.1. ギリシア語から派生した動詞

まず、ギリシア語から派生してアルバニア語本来の語を駆逐（或いは競合）している動詞を、その語形によって分類する。多くは、ギリシア語のアオリスト語幹から形成されている（Sasse 1991b: 278ff.）。単数一人称現在形を示す。

(i) - ís 語尾

aγapís < αγαπώ（aor. αγαπήσω）「愛する」（alb. dashuroj）

eʎpís < ελπίζω（aor. ελπίσω）「望む」（alb. shpresoj）

furrnís < φουρνίζω（aor. φουρνίσω）「（パンを）焼く」（alb. pjek）-r- でなく -rr-となっているのは furrə「かまど」からの類推と考えられる。

(ii) - ás 語尾

angaʎás < αγκαλιάζω（aor. αγκαλιάσω）「抱擁する」（alb. përqafoj）

proftás < προφταίνω（aor. προφτάσω）「到着する」（alb. mbërrij）

(iii) - és 語尾

mborés < μπορώ（aor. μπορέσω）「できる」（alb. mund）

penés < (ε)παινώ（aor. (ε)παινέσω）「誉める」（alb. lavdëroj）

(iv) - ús 語尾（１つしか収録されていない）

ipakús < υπακούω（aor. υπακούσω）「従う」（alb. bindem）

(v) - os 語尾

kʎiðós < κλειδώνω（aor. κλειδώσω）「閉じる」（alb. mbyll）

ʎós < λυώνω（aor. λυώσω）「解く」（alb. prish）

(vi) -ks 語尾

ðiatáks < διατάζω（aor. διατάξω）「命じる」（alb. urdhëroj）

ipárks < υπάρχω（aor. υπάρξω）「存在する」（alb. ekzistoj）

(vii) -ps 語尾

peðéps < παιδεύω（aor. παιδέψω）「苛める」（alb. mundoj）

vasiʎéps < βασιλεύω（aor. βασιλέψω）「支配する」（alb. mbretëroj）

(viii) - σ を含まないアオリスト語幹からの派生例

アオリスト語幹が- σ を含まず ρ- やその他の子音で終わるギリシア語の動詞がある。こうした動詞から作られた動詞の語尾は、-s でなく-r で終わる形になる。

fumár < φουμάρω（aor. φουμάρω）「煙を出す」（alb. tymos）

anafér < αναφέρω（aor. αναφέρω）「通知する」（alb. njoftoj, lajmëroj）

łav < λαβαίνω（aor. λάβω）「（手紙を）受け取る」（alb. marr, dorëzoj）

(ix) 以上の他に少数ではあるが、現在語幹から派生する例もある。例えば、既出の ipárks < aor. υπάρξω「存在する」には、現在形 υπάρχω から作られた ipárçという語形が併存している。

1.2. ギリシア語から派生した動詞接頭辞

Arvanitika の動詞にも、標準アルバニア語と同じ n- や m-、z- や ʃ-、pər- 等アルバニア語本来の接頭辞が残っているが、一方でギリシア語に由来する接頭辞も多い（Sasse 1991b S.262ff.）。これらは、動詞と結び付いて様々な意味の派生形を作り出すことができる。この接頭辞による豊富な造語力は、標準アルバニア語に見られない顕著な特徴の一つである。次に主なものをあげる。

(i) apo- < απο-

動作の結果等を表わす。

apo-bə́nem「（誰かに何か）起こる」< bə́nem「なる」（alb. bëhem）

apo-há「食べ尽くす」< há「食べる」（alb. ha krejt）

標準アルバニア語の krejt は副詞で「すっかり」の意味である。

(ii) kse- < ξε-

動作の打消、完了、解除等を表わす。アルバニア語の接頭辞 z-（標準語では ç-, zh-）と同じ意味だが、今日 Arvanitika では z- よりも頻繁に用いられる様になっている。極めて造語力の強い接頭辞で、ギリシア語からの派生動詞と結び付いた形でも多く見られる。

kse-ɫóðem「休む」< ɫóðem「疲れる」（alb. çlodhem）

kse-kɫiðós「解き放す」< kɫiðós「閉じる」< κλειδώνω（alb. çel）

kse-skurjás「錆を落とす」< skurjás「錆付かせる」< σκουριάζω（alb. çndrushk）

この接頭辞がアルバニア語由来の動詞に結び付くと、別なギリシア語の動詞と同じ意味のものが作られる。

kse-ʃés「売り尽くす」< ʃés「売る」（alb. shes krejt　gr. ξεπουλάω）

kse-báɲ「息の根を止める」< báɲ「する、行う」（alb. qëroj?　gr. ξεκάνω）

注目すべき点は、こうした語形成の結果、本来のアルバニア語の動詞では作り得ない動詞がしばしば作り出されていることである。例えば「売り切れる」をアルバニア語の動詞で表現する場合、副詞を伴って初めて正確にその意を伝えることができるが、Arvanitika ではただ１つの接頭辞付き動詞でこれが可能になるのである。また例えば、アルバニア語にも ia këndon kulufruthin「息の根を止める」という慣用表現は存在するが、上述の動詞 kse-báɲは語形成の上では全く別のもので、むしろギリシア語の影響によって作り出された動詞と言える。

また、接頭辞をとっても意味が変わらないものもある。

kse-morrás < morrás「虱をとる」（alb. morris, çmorris）

(iii) ksana- < ξανα-

動作の再開、繰り返しを表わす。この接頭辞も kse-と同様、本来のアルバニア語で対応するものがない動詞を作り出すことができる。アルバニア語にも似た様な接頭辞に ri-があるが、これ程造語力が強いとは言えない。

ksana-ðjavás「再読する」< ðjavás「読む」（alb.lëxoj përsëri　gr. ξαναδιαβάζω）

ksana-báɲ「繰り返す」< báɲ「する」（alb.bëj përsëri, rimarr　gr. ξανακάνω）

ksana-θóm「もう一度言う」< θóm「言う」（alb. them përsëri　gr. ξαναλέω）

ksana-há「もう一度食べる」< há「食べる」（alb. ha përsëri　gr. ξανατρώω）

標準アルバニア語の përsëri は副詞で「再度」の意味である。

(iv) kata- < κατα-

動作の結果等を表わす。

kata-ɫóðem「疲れきる」< ɫóðem「疲れる」(alb.lodhem krejt　gr. κατακουράζομαι)

kata-pɫása「私は我を忘れた」< pɫása「破裂した」(alb. plasa　gr. κατάσκασα)

(v) para- < παρα-

動作の強調、過剰を表わす。これも造語力が強い。

para-θóm「喋り過ぎる」< θóm「言う」(alb. them tëpër　gr. παραλέω)

para-há「食べ過ぎる」< há「食べる」(alb. ha tëpër　gr. παρατρώω)

para-fɫé「寝過ぎる」< fɫé「寝る」(alb. fle tej mase　gr. παρακοιμάμαι)

標準アルバニア語の tëpër や tej mase は「ひどく」とか「かなりの程度」という意味。「ひどく喋る」とか「かなり眠る」ということになる。

(vi) この他、次の様な形容詞や副詞もギリシア語と同じ様に動詞形成で用いられる。

kało-pagúaɲ「気前良く払う」< pagúaɲ「払う」(alb. paguaj mirë　gr. καλοπληρώνω)

kako-pagúaɲ「払いが悪い」< pagúaɲ「払う」(alb.paguaj keq　gr. κακοπληρώνω)

proto-báɲ「初めてする」< báɲ「する」(alb. bëj për të parën　gr. πρωτοκάνω)

(v) や(vi) の動詞を標準アルバニア語で同じ様に作ることは、まずできない。従って、動詞＋副詞（句）の形に書き換えるしかないのである。

2. Arvanitika の動詞句

次に、Arvanitika の動詞句における特徴を幾つか見てみよう。

2.1. 未来、願望の表現

アルバニア語では未来の意志や願望を表わすのに、動詞 dua「欲する」の３人称単数形 do＋動詞接続法の分析的形式を用いる。標準書き言葉における接続法は常に小辞 ë を伴うので、実際は do ë＋接続法で表わされることになり、do＋接続法の形は規範からの逸脱と見なされている（Buchholz / Fiedler 1987: 144-146）。θα（< θέλω＋να）＋動詞の形による単純未来の表現によく似ている。

しかし Arvanitika におけるこの種の表現に、ë を伴う形はまったく見られない。

次の２例でも常に do のみの表現になっている。なお、dot は do に母音が後続する場合の別形である[6]。

(1) **do** véte ndə̄ mɣazí eðé **do** pí kafé.
will go-subj.sg.1 to inn-sg.acc. and will drink-subj.sg.1 coffee-sg.acc.
「私は宿屋に行ってコーヒーを飲もう」

(2) **do** tə ɟúaɲə fiłoχtój, **dot** e báreʃ ðekastírjonə
will sg.2 expell-subj.sg.3 Filaxtos will sg.3 lose-subj.sg.2 suit-def.sg.acc.
「君をフィラクストスは追い出すだろう、君は訴訟に負けるだろう」

条件節等に用いられる接続法には tëに相当する小辞 təが見られるので、təは完全に消失したわけではない。一方で、サラミス方言に関する研究の中に、歌曲や比較的古いテクストには do＋təの形が僅かに見受けられるという報告がある（Haebler 1965 S.141）。

その他に逸脱の例として、標準語では do と共起し得ない否定詞 mos（本来は命令法や条件法で用いられる）と do の併用があげられる。

(3) **do** mos ia jap 「彼にそれをあげないだろう」
will not sg.3.dat.＋sg.3.acc. give-subj.sg.1

2.2. 弱形人称代名詞との組み合わせ

アルバニア語は弱形人称代名詞と緊密な動詞句構造を作る。こうした傾向は Arvanitika にも（また現代ギリシア語にも）見られるが、標準語と異なる点も幾つかある。まず人称代名詞の変化表を示す。

	sg.1	sg.2	sg.3
nom.	ú	tí	áj (m.) ajó (f.)
acc.	múa/mə	tí/tə	atə̄/e
dat.	múa/mə	tí/tə	atíja (m.) asája (f.)/i

	pl.1	pl.2	pl.3
nom.	ná	jú	áta (m.) áto(f.)
acc.	néve/na	júve/u	áta (m.) áto(f.)/i
dat.	néve/na	júve/u	atíre/u

［強形／弱形］

これらの内、間接目的語と直接目的語の弱形が組み合わされ、しばしば融合形で動詞の直前に置かれるのだが、これには制限がある。第一に、こうした融合形の組み合わせは、直接目的語が3人称である場合にのみ可能である。

(4) ma　　ðánə　　「私にそれを与えた」（alb. ma dhanë）
sg.1.dat.＋sg.3.acc.　give-aor.pl.3

これに対し直接目的語が1人称ないし2人称である場合は、それらのみが弱形として動詞の前に置かれる。間接目的語は独立して強形をとり、決して弱形をとらない。ここまでは標準語でも同様なのだが、Arvanitika では前置詞 ndə (ndé)＋対格強形の形で動詞に後置されるのが普通である[7]。

(5) mə　　jép　　ndé　　tí　　「私を君に渡す」（alb. të jep mua）
sg.1.acc.　give-sg.3　to　sg.2.acc.

(6) u　　təргój　　ndé　　múa　　「諸君を私（のところ）に送った」
pl.2.acc.　send-aor.sg.3　to　sg.1.acc.　　(alb. ju dërgoi për mua)

例(6)は標準語でも近い構文を作り得るが、例(5)は Arvanitika に独特のものである。ここには、間接目的語としての与格がむしろ前置詞句に置き換えられ易くなっている可能性が考えられる。現代ギリシア語と同様、多くの名詞・代名詞で与格が対格に吸収され区別がつきにくくなったことも、その一因ではないかと思われる。事実、普通名詞でも前置詞句による与格書き替えの例が幾つか存在する。

(7) θá　　ndə　　djáʎə　＝ i　　θá　　djáʎit 「彼はその子に言った」
say-aor.sg.3　to　son-sg.acc.　　sg.3.dat.　son-sg.dat.

3. 考察

以上の内容から Arvanitika の動詞及び動詞句における特徴を考えてみよう。

もともとアルバニア語は多くの動詞接頭辞を持ってはいるが、それでもドイツ語における動詞前綴りの様に、豊富な語形成能力を持っているわけではない。従って動詞の意味を補う為に、副詞が頻繁に動詞と組み合わされている（krejt『すっかり』や tëpër『大変に』等）。ところが Arvanitika の場合、ギリシア語由来の接頭辞を導入することによって、より多岐にわたる動詞語彙形成が可能となっている。

一方、動詞を中心とする句の構造については、未来形や前置詞句[8]との関係において標準語と若干異なる点が見られたが、これらの相違にギリシア語の統語構造が影響しているかどうかは明らかでない。この点については更に検討の余地がある。

総じて、Arvanitika の語彙レヴェルではギリシア語からの借用や派生の割合が高いものの、統語構造においてはアルバニア語の独自性をかなりの程度まで保っていると言える。しかしその一方、標準語の規範を逸脱した動詞句の構造が若干現れていることも、事実である。ここには、長期にわたりギリシア語圏に包囲され、標準アルバニア語の体系化から取り残された状況下で辛うじて生き残った Arvanitika の地理的・歴史的条件が大いに関わっていると考えられる[9]。今後、北東ボイオティア方言に続いて公表されるその他の地域の方言テクストによっても、上述の傾向を確認する必要があろう。

註

1) ちなみにアルバニア国内のギリシア系住民は6万人程度と言われている。ただし一方で30万人というギリシア側の見解もあり、正確に把握されているとは言えない（Hall 1994: 25, 190）

2) 普通名詞、特に日常的に用いられるものの多くは、ギリシア語にとって代わられている（Sasse 1991b: 268-278）。例；vivʎío, -a < βιβλίο (alb. libër), ʎeoforío, -a < λεωφορείο (alb. autobus), astinomí,-a < αστυνομία (alb. polici), tileóras, -i < τηλεόραση (alb. televizor), zoí, -a < ζωή (alb. jetë)。語の後の母音は定冠詞語尾。

一方、ギリシア語の隠語の中に Arvanitika が少なからず見られるのは興味深い（Sasse 1991b S.7）。

例；érðε < érð「来たぞ」, στρουγκού < ʃtrúngə「（もとは『乳搾り場』の意）ぶた箱」, νάκα < nákə「（もとは否定詞）だめだ！」

3) 特に顕著なものとして、例えば二重子音 kl から無声硬口蓋閉鎖音[c]、gl から有声硬口蓋閉鎖音[ɟ]への音韻変化が起こらず、中世以前の二重子音が保持されている点を挙げることができる。例；gʎúhə「言語」（alb. gjuhë）, kʎúməʃ「牛乳」（alb. qumesht）。

4) Arvanitika はドイツ語圏でこのまま無冠詞の中性名詞として、または das Arvanitische の様に形容詞由来の名詞形で用いられている。

5) 典型的なものとして、動詞語幹に後続する-ɲ や-n（古形-njëに相当）が、し

ばしば今日の語形と併存している。この傾向は特に単数１人称と複数３人称で顕著である。また標準語では消失したはずの母音əが多く残っている。

例；marr「する、行う」の語形変化（語幹 marr-）

sg.1 márr, sg.2 mérr, sg.3 mérr, pl.1 márrəmə, pl.2 mírrni, pl.3 márrənə

または

sg.1 márrəɲ, sg.2 mérrən, sg.3 mérrən, pl.1 márrəjmə, pl.2 mírrni, pl.3 márrəɲnə

(alb. marr, merr, merr, marrim, merrni, marrin)

martój「結婚する」の語形変化（語幹 martó-）

sg.1 martóɲ, sg.2 martón, sg.3 martón, pl.1 martójmə, pl.2 martoni, pl.3 martóɲənə

(alb. martoj, marton, marton, martojmë, martoni, martojnë)

(6) 地域によっては更に語頭の d-が脱落し、o または ot となる例もある。

(7) この ndéも実は中世以前の形で、現在の Arvanitika では-d-が脱落して néとなっている。Arvanitika における古形保持の一例である。なお、本文で示した様な用法は、標準語の nëには確認できない。

(8) Arvanitika における前置詞句の興味深い用法の一つに、ngá「～から」を用いたものがある。この前置詞は「起点」や「通過点」の他に「全体の中の部分」を表わすことが知られている（Buchholz/ Fiedler 1987: 378-379）。

この場合は、部分を表わす名詞＋nga＋全体を表わす名詞という構造が普通である。

Kjo antologji përmban dhe pjesë **nga** poezia e Naim Frashërit.

this anthology hold-sg.3 also piece of poetry of N.F.

「この作品集はナイム・フラシャリの詩からも数編を掲載している」

ところが Arvanitika には、部分を表わす名詞がしばしば省略され、ngá＋名詞（複数）が事実上動詞の目的語句であるかの様に用いられる例がある（Sasse 1991b: 333-334）。

kémi ngá túti ＝ kémi túti

have-pl.1 of all

「我々は何でも持っている（全ての中から持っている）」

háng**re** **ngá** ató móła(tə) ＝ háng**re** ató móła(tə)

eat-aor.sg.2 of those apple-pl.acc.

「あのリンゴ（の中から全部を）食べた？」

この様な用法は、現代ギリシア語の από を用いた表現にはほとんどない様である。

(9) 実際に、Arvanitika をほとんど用いなくなったアルバニア系住民に母語の再建を試みて貰った例がある（Sasse 1991a: 67-68）。この人物は「私は豆を食べた」という意味で kam ha fasolja と発話した。ここでは完了形の誤用（正しくは habere＋分詞で kam ngrënë なのに、現在形 ha をそのまま使っている）の他に、明らかにギリシア語 φασόλια の語形に影響された格語尾の誤用が見られる。正しくは fasulje なのである。

参考文献

Bartl, Peter (1995). *Albanien. Vom Mittelalter bis zur Gegenwart.* Regensburg: F.Pustet.

Buchholz, Oda / Fiedler, Wilfried (1987). *Albanische Grammatik.* Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

Camaj, Martin (1966). *Albanische Wortbildung.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Demiraj, Shaban (1993). *Historische Grammatik der albanischen Sprache.* Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Demiraj, Shaban (1994). *Gjuhësi ballkanike.* Shkup: Logos-A.

Gjinari, Jorgji (1989). *Dialektet e gjuhës shqipe.* Tirana.

Haebler, Claus (1965). *Grammatik der albanischen Mundart von Salamis.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Hall, Derek (1994). *Albania and the Albanians.* London: Pinter.

Jochalas, Titos P. (1977). Gli studi albanologici in Grecia. *Akten der internationalen albanologischen Kolloquiums* (Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft Sonderheft 41), 85-95.

Jochalas, Titos P. (1983). Die Balkanlinguistik in Griechenland. *Ziele und Wege der Balkanlinguistik.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 104-114.

Mackridge, Peter (1985). *The Modern Greek Language.* Oxford: Oxford Univ.Press.

Mirambel, André (1987). *Grammaire du grec moderne.* Paris: Klincksieck.

Sandfeld, Kr. (1930, rpt. 1968). *Linguistique balkanique. Problèmes et résultats.* Paris: Klincksieck.

Sasse, Hans J. (1991a). Zur Situation der Erforschung des Arvanitischen. *Aspekte der Albanologie.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 61-70.

Sasse, Hans J. (1991b). *Arvanitika. Die albanischen Sprachreste in Griechenland,* Teil 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Zu Verben und Verbalphrasen im Arvanitischen (NOAB)

IURA Ichiro

Unter den albanischen Sprachresten in Griechenland (Arvanitika oder das Arvanitische) findet man einerseits zahlreiche lexikalische Entlehnungen aus dem Neugriechishen, andererseits relativ fest erhaltene syntaktische Eigentümlichkeiten des Albanischen. Bedingt durch die geographische und kulturelle Absonderung von Albanien sind sowohl phonologische wie morphologische Formen des Mittelalters erhalten geblieben, die heute in der albanischen Schriftsprache nicht mehr vorkommen.

Dieser Aufsatz behandelt diese Eigentümlichkeiten des Arvanitischen, insbesondere bei den Bildungen der Verba und Verbalphrasen im Nordostattikoböotischen (eine typische arvanitische Mundart in dem Gebiet, das die Dörfer der Arvaniten im nordöstlichen Teil der Eparchia Attika, z.B.Markopulo bzw. Avlon, umfaßt; NOAB), im Vergleich mit dem Neugriechischen und der albanischen Schriftsprache.

Albanische Präverbien sind im Arvanitischen erhalten. Dazu macht die Entlehnung neugriechischer Präverbien noch mannigfaltigere Wortbildungen bei den arvanitischen Verba möglich. Es ist mit größter Wahrscheinlichkeit anzunehmen, daß die Produktivität der Wortbildungen bei den arvanitischen Verba mit neugriechischen Präverbien sich nach der Produktivität der neugriechischen Ausdrücke richtet.

In der arvanitischen Futurform kommt, mit Ausnahme noch einiger älterer Texte, die albanische Partikel *tə* nicht vor, die zur Bildung des Futur-Konditionals in der Schriftsprache nötig ist. Andererseits erscheinen andere Partikeln mit Futurform, die mit der Futurform der Schriftsprache nicht zusammengesetzt werden können.

Bei arvanitischen Verbalphrasen mit der "schwachen" Form des Personalpronomens tritt oft die "starke" Form des Personalpronomens mit der Präposition *ndə* an die Stelle der "schwachen" Form. Diese syntaktischen Abweichungen von der albanischen Schriftsprache sind wahrscheinlich unter den sprachlichen Einflüssen des Neugriechischen entstanden.